

# アジアのジャン・モネ

前本社主筆 船橋 洋一

山本正さんは、日本の民間人が、世界と深く対話し、共通のビジョンに向かって共同作業する時、どれほど大きな仕事をすることができたかを身をもって示した国際人だった。

下田会議、日米議員交流、日米欧委員会(その後三極委員会)、日韓知的交流会議、アセアン・日本ダイアログ、日米中協力プロジェクト、グロ

日本国際交流センター理事長

## 山本正さんを悼む

「バル・ヘルズと人間の安全保障」……民間の独立した立場と視点から、世界の中での日本の果たすべき役割を探求しつつ、海外要路との国際交流を実践した。その足跡は、戦前の渋沢栄一、戦後の松本重治に次ぐ、と私は思う。

その後、山本さんの志す「知的交流」に参加する機会を数えられないほど与えていただいた。83年、ハワイで行われた日米経済摩擦に関する共同研究発表の場に招かれた時のことも忘れられない。そうそうたる米国の連邦議会議員が、提出論文を熱心に読み、メモを取り、発言する姿に感銘を覚えたが、そのような中身の濃

い政策対話を可能にした山本さんに深い敬意を抱いた。私を含めどれほど多くの人が山本さんに機会を与えられたことか。山本さんはギビング(施すこと)を天職とした人だった。山本さんは、日米の懸け橋として知られているが、アジアとの懸け橋でもあった。90年代末、パリで「欧州とアジア」をテーマにした国際会議が開かれた際、山本さんを含めアジアの出席者と食事をしたことがある。「これからのアジアに必要な

なのはジャン・モネだ」と韓国の外交官が言ったとたん、食卓を囲んだ何人もが「タダシがアジアのジャン・モネだ」と一斉に声を上げた。欧州統合の生みの親として知られるジャン・モネのことである。生業はコニャックの輸出業。生涯、官位を求めなかった。欧州各国首脳とその補佐官たちの間を自由に往来し、実務的想像力を武器に、欧州統合を働きかけ、夢をビジョンに変えた。

山本さんもそのように生涯にビジョンを追い求めた。そして、何よりも謙虚だった。謙虚さは、戦後の日本の出直しに何よりも必要な要件だっただろうし、日本が経済大国となつてからはなおさら必要な資質であるはずだった。山本さんの友人でインドネシアを代表する論客、ユスフ・ワナンディ(CSIS(戦略国際問題研究所)副会長は「タダシの魅力は謙虚さだ。日本の戦後の魅力もまたそこにある」と言っていた。山本さんとともに、そうした日本の戦後もまた消えていくような喪失感を感じる。